

今回のアップがだいぶ遅れてしまったのには訳がある。1974年12月17日の講義をそのまま注釈を加えてもなかなか理解が及ばないものと判じ、予備的な解説(それが本稿である)をまずお読みいただき、その上でセミナーに移ることにした。

セミナー、講演、インタビューは当然話し言葉が中心となる。『エクリ』その他書かれたものもあるが、Étourditでラカン自身が名付けたマテームは50年代のラカンにおいても既に存在していたし、それらはラカン自身がある場で黒板に記したものの、あるいは予め用意した紙面で示されたものであるが、その定義は判然としない。グラフとかréseauと呼ばれているものとはマテームの組み合わせといえるのか、曲面のトポロジーの図は、そしてボロメオの輪はどう位置付けられるのか。それらをエクリチュールとするとして、それぞれはどういう特性をもっているのか。この質問に明快な答えを出しているものにはまだお目にかかっていない。

D'un discours qui ne serait pas semblant の1971年 2月17日のセミナーにおいて、ラカンは主人のディスクールの式を示しながら、これは書かれたものécritであり、これをこれだけでは聴衆は理解できないであろうとし、こう付け加える。「この点で、書かれたものl'écritは話し言葉la paroleとは異なります。理解されるためには書かれたものに話し言葉を付け加え、丹念に味付けしl'en beurrer sérieusementなければなりません。しかし当然、原理上そこには不都合な問題が生じてきます。」と言っており、さらに「もちろん書かれたものécritへの道を切り開くのは話し言葉paroleからです。わたしの『エクリ』のタイトルをこうしたのは、書かれたもの、écritの試みがそれがグラフに行き着くことを存分に示しているからそうしたのです。厄介なのは、グラフから直ちにわたしの意図を説明できるとする輩です。かれ等は間違っています。グラフは『エクリ』の微妙な文体の効果ともいえるものに依じてのみ理解できるものです。『エクリ』は謂わばそのための踏み台なのです。その代わり、書かれたものécritはそれだけを取り出すと、しかじかのシェーマとなります。シェーマLとかそれ以外、あるいは大掛かりなグラフも誤解を引き起こす因となっています。」と言いつつも「書かれたものl'écritは言語langageのあらゆる機能との関連において一次的なものpremierではなく二次的なもの」と明言している。

しかしながら 1959 年以降、ジュイッサンスが欲望に代わってラカンの主の領野 (しばしば欲望はフロイトの領野、ジュイッサンスはラカンの領野と対比される。断っておくが、欲望とジュイッサンスは対立概念ではない。このことは後述する)になるにしたがい、いわゆる後期ラカンにに向かってクラシカルなラカンの諸概念は刷新されてゆく。

問題はズバリエクリチュールについてである。1974年12月17日の講義の冒頭でラカンはle nœud borroméen peut s'écrire, puisque c'est une écriture, une écriture qui supporte un Réelと言っている、この説明をしなければならない。Serge Leclairが1968年に上梓したPsychanalyserというタイトルの書物(Seuil社のPointsシリーズの61)がある。性感帯(これが解剖学的には決して規定できないものであることが強調されている)、身体への記載、印marque、固着といったテーマを巡って次のような記述を読むことができる。

性感帯化érogénéisationの過程は、もし皮膚のある点の性感帯について「開口」ないし「記載」を時系列的に追うとなると、細心の注意をもって厳密に記述する必要がある。おそらくこう考えれば良いのであろう。つまり、身体の開口部の内側に相当する部分に接する外の境界は他のautre肌による愛撫を必要besoinとする。しかしながら、このことにわれわれはアクセントを置くわけではない。むしろこう想像するがいい。母親の指の手触りの心地よさが、赤子の首とこれに隣り合わせた局所にある小孔に「他愛なく」愛の時を奏でると、赤子の面差しは微笑みで輝く。こう言っていていいであろう。手指はそのやさしき愛撫をもって、この窪みに印を刻印し、ジュイッサンスの噴火口を開口し、文字を記し(下線：筆者による)、この文字は瞬時に啓発を招く。窪みにおいて性感帯は開口するが、そこには懸隔が固定されこの懸隔は抹消されることは不可能となる。しかしながらこの懸隔があってこそ快樂の特権的営みが実現するのである。対象さえあれば、その対象が何であれ、この懸隔となる部位に訪れれば文字が固定した微笑みの輝きは蘇る。

Leclaireは性感帯について述べているが、このことは外傷とそれによる症状の成立と同様のメカニズムとしても読むことができよう。ジュイッサンスについてここでこと細やかに述べる暇はないが、ここでも断っておくが、快感plaisirとジュイッサンスも対立概念ではない。快感が決定的満足をもたらすならば、その反復はあり得ない。対象喪失という言葉があるが、これは精神分析用語とはなりえない妄言である。喪失したのであれば、再発見すればよいとなる。しかし最初の満足の体験を与えた対象などそもそも存在しないのである。このことが示されているのが、ものla Choseの記述である。『快感原則の彼岸』においてフロイトは反復を問題提起として議論を進めているが、結局快感原則の彼岸には達することがなかった。現実原則は快感原則に奉仕するものであり、ラカンのle Réelはフロイトのla réalitéではない。死の欲動についてのフロイトの追究が不徹底なことへの批判としてラカンのジュイッサンスは生まれるべきして生まれたのである。快感とその逆である不快が未来永劫に反復するつまり欲動の反復強迫的性格の根底にあるのが死の欲動であり、その悪魔的側面はダナイドスの壺に代表される(séminaire XVI, "D'un Autre à l'autre, 21/05/1969)。常にune manqueが生じるわけだからun plusが必要なわけで、この意味でplus-de-jourirはジュイッサンスの核心的様態といえる。外傷について触れたので付言しておくが、外傷は症状を永続化する。愛撫と誘惑(する／される)は表裏一体なのである。『心理学草稿』にあるエンマの隠蔽記憶である食料品店での店主による愛撫(性的虐待とは紙一重といえる。かの女はもう一度この食料品店を訪れている)により性感帯は画定したのであるが、後になってある店において二人の店員からかの女の着ている服について性的なものが醸し出す笑いを招いたと感じた(つまり服により誘惑した／誘惑された)ことにより、ひとりで店に出入りできないとする症状が固定化したのである。症状もジュイッサンスである。parlêtreである以上ひとはみな病んでいる。Erik Porgeがle symptôme généraliséについて述べているが、このことも後述する。いずれにせよ、小生にはPsychanalyserは後期ラカンのparlêtreやlalangueを先取りしているように思えるのである。

もうひとつ、これも同日の講義の冒頭でラカンが述べていることであるが、かれはこう言っている … je vous écris le minimum, ce minimum est assez pour que vous y reconnaissiez à gauche le nœud borroméen … 「…最小限のことを書きます。この最小限はわたしの左にあるボロメオの輪を見ていただければ十分通じると思います…」。このle minimumは同講義の途中で出てくるl'écart de sens

と言う表現、そしてL'écart de sens est là supposé pris d'un certain maximum. Quel est le maximum admis d'écart de sens ? 「意味の拡るがりは最大限どこまでか想定できるものです。意味の拡るがり許される最大限とはどこまででしょう」と言ったラカンの自問と対をなしているが、この点においては Jean-Claude MilnerのL'œuvre claire(Seuil, 1995)とKnox Pedenとの対談La Force du minimalisme: un entretien avec Jean-Claude Milnerが参考になる。MilnerのL'œuvre claireについては批判も多いが(例えば、Jean AllouchのD'un «problème Milner»参照のこと)、筆者の目からすると、Milnerという人は言葉の使い方が雑で、新造語もあるが、他から借りてきた表現にも勝手に自己流に解釈して用いるところがある。鼻真目で見れば、ラカニアンをあいだでの議論を観戦しながら岡目八目的な解釈を挟んでいるとも言える。この点で読む人に問題提起を与えることができる人である。しかし、実戦経験のない解説者のようにプロフェッショナルな意識は希薄である。お前も同じ穴の貉ではないかとお叱りを受けるかもしれないが、少なくとも筆者はラカニアンである。もっともMilnerがアンチ・ラカニアンかということ、そうでもない。しかしdécontractionまで持ち出してくるとなると読むに臆するところはある。デリダ自身であれば、たとえ他人の禪で相撲をとってきたと批判は受けるかもしれないが、少なくともかれは同じ土俵に立って相手とはフェアな戦いを続けてきたのだ。L'œuvre claireに比べれば、自らは同じ土俵に立ってはいないのだが、師範代が書いたLe titre de la lettreの方が正攻法でラカンを論じていると言える。

Milnerはラカンの業績をセミネール初期におけるシニフィアンの優位、象徴界、想像界、現実界の理論等を(1)premier classicisme, mathèmeに代表されるラカンを(2)le second classicisme, 最晩年のラカンをデリダから借りてきた(3)déconstructionと三つに分類する。筆者は本書のすべてに目を通したわけではなく、もっぱらボロメオの輪導入以降のラカンについて書かれている箇所についてしか言及できないが、La Force du minimalisme: un entretien avec Jean-Claude Milnerからラカンのカイエ・プル・ラナリーズとその顛末のなかでの位置付け、フランスに語圏エピステモロジー対英語圏エピステモロジー(とかれは呼ぶが、ほぼ分析哲学の系譜と重なるとみてよいであろう)がラカンにどのような影響を及ぼしたかなど、あくまでMilner自身の視点からであるが、見て取ることができる。(1)のラカンは所謂構造主義者における「属性を持たない構造」の最たる者であり、Milnerはかれをhyperstructuralisteと呼ぶ。例えば、かれのシ

ニフィアンの理論はシニフィエを必要とせず、他のシニフィアンとの差異のみ問題とし、一方でこのシニフィアンが能動的(signifiantはたしかにsignifierの能動性を示す現在分詞でありsignifiéは受動性を示す過去分詞である。Milnerはシニフィアンの能動性はこのシニフィアンが構造そのものを作り出す、と言っている)に作用する点などを論拠として挙げている。この能動性は構造そのものが唯一示す能動性、純粹活動である。因みにラカンが用いるディスクールは、この点にはMilnerは言及していないが、Alexandre KoyréがBachelardのcoupure épistémologiqueをdéplacement de discoursと換言したことにより、より影響力のあるKoyréからの自家薬籠中なのかもしれない。

もうひとつ、Milnerの造語であるlittéralisationはラカンと数学との関連で射程内にあるものと看做せる。L'œuvre claireにはそのような記述は見出せないものの、ポロメオの輪を論ずるにあたって、ラカンはJean SorryやMichel Thoméに援助をもとめていたが、かれらは結び目(ないし絡み目)について、多項式をほとんど用いることなく、いわばラカン流に援助の手を差し伸べていた。これはmathématisationではなく正しくlittéralisationの範疇である。

L'œuvre claireではこれはle littéralに固有なもので、そり正確に言えばle littéral mathématiqueに固有なものと書かれている。既に述べたとおり、mathèmeという語が初めてラカンの口から発せられたのはl'Étourditにおいてであるが、遡及的にみれば、シニフィアンの諸式、objet a等もmathèmeであり、これらはpremier classicismeにおいて既に存在していたことになる。じじつ、Milnerはポロメオの輪にpremier classicismeの再現を見て取る。これは寧ろポロメオの輪が現実界、象徴界、想像界(これらが導入されたのがpremier classicismeであることはよいとして)と関係しているからと理由を述べているのだが、これでは形式主義と内容主義の混淆による不徹底さの誹りをまぬかれない。Milnerはmathèmeの使用は数学から借りてきた記号のlecture hyperbourbakisteであるとする。言いたいことは公理論的であるということであろう。minimalismeが意味するところとなんの違いがあるのでしょうか。ポロメオの輪の話に戻ると、MilnerはEncoreを引用している。「数学的言語の固有性とは、単なる証明というものへの要請について言えば、この固有性が十全に示された暁には、示された数式や図のすべては、それについて語られたコメントというよりは文字の操作において、この文字のひとつに欠損が生じれば、他のすべての文字はその配置がもつ効力を失うばかりか、ばらばらにしてしまうものなのです」(Séminaire XX, Encore,

version millèrienne, p.116)。このラカンの言葉はまさにボロメオの輪についてのマニフェストであるのは確かであり、Milnerのいうlittéralitéがボロメオの輪の本質であることを示している。そしてここに理性の連鎖chaînes de raisonsといった表現をMilnerは挟むが、ここにラカンの読解におけるかれのlinéalな構造への嗜好を読み取ることができる。一方でornicar誌上で発表されたR.S.I.のおそらく筆者が前回アップした1971年12月10日の講義のまさにlittéralitéの表れてある内容の取捨されたR,S,Iとフロイトの、そしてラカンの『不安』のセミネールで図式化された「\_制止」、「症状」、「不安」のトリアスがボロメオの輪に組み込まれていることに対する当惑は筆者も共有することのできるものである。但し、これをle premier classicismeがle second classicismeに居候しているのではとする筆省は如何なものか。

ボロメオの輪は主体のトポロジーを表したものと言って異論はないであろう。主体といってもラカンの主体は無意識の主体である。Milner はニュートンのl'hypotheses non fingere「わたしは仮説を立てない」とは逆にラカンは無意識(の主体)についての仮説を立てているとしている件を再度 Encore から引用している。「わたしの仮説は、無意識に侵された affecté 人間の個人 l'individu とはシニフィアンの主体とわたしが呼んでいたものことなのです」(ミレール版【ibid., p.120】における原文は Mon hypothèse, c'est que l'individu qui est affecté de l'inconscient est le même qui fait ce que j'appelle le sujet d'un signifiant となっており、筆者の意訳はクラシカルなラカン【これは Milner の le premier classicisme とはまったく異なり、およそ 1959 年以前のセミネールにおけるラカンとっていただきたい】に対する後期ラカン自身の申し開きが諷諭されていることを踏まえている)。ことさら l'individu といった語を選んだこと、affecté をこう訳したわけは parlêtre, la langue という語の導入を意識してのことである。この点は後述することとなる。奇しくも R.S.I.、当の 1974 年 12 月 17 日の講義にもこの l'hypotheses non fingere は出てくるが、Encore とはまったく異なったコンテキストで述べており、しかもボロメオの輪そのものに関して語っているのであるが、これは『セミネール R.S.I., 17 Décembre 1974』本体のアップに譲りそのなかで説明する。思うに Milner は後期ラカンの理解について欠落しているところが多い。

いずれにせよ、Encore のこの件における Milner の解釈(L'œuvre claire, p.143)と筆者の解釈は根本的に異なっている。Milner はフランスのエピステモロジス

トの影響下で活動してきたのであるが、一方でポッパーやラカトッシュも読んでいたのであり、scienceを「科学」と看做し、「仮説」をよりポッパー的に捉え(双方とも必ずしもMilner自身肯定的ではない)ている節がある。ラカンがscienceという語をもちいるとき、その意味は一様ではなく、ときには「知」と訳したほうが良い場合がある(もちろんラカンの「知」は逆説的である)。「仮説」についていうならば、ニュートンが立てなかった仮説とは万有引力の法則そのものではなく、なにが(もしかしたら神が)この万有引力の原因(アリストテレス的な意味で)となっているのかに関してである。「万有引力の法則」自体はポッパー的な意味での仮説であり、ニュートンは経験(実験)を通じて科学的な業績を成し遂げたのである。そして特殊相対性理論はその反証であるという図式はポッパー的には成立する。

Milnerは引き続きラカンのsujetについて、ある意味で論述的に話を展開しているのだが、いちいちこれに批判を加えることは差し控えたい。そのかわりシニフィアンないし言語と身体との関係を後期ラカンにおいて概観することにする。まず後期ラカンの造語のいくつかについて若干の注釈を加え、これを手引きとして話しを進めることにする。

まずparlêtreである。Joyce avec Lacan所収のラカン自身による、1975年6月16日にソルボンヌにて行われた講演Joyce le symptôme II(J.-A. Millerによりテキスト化)の次の件は簡にして要を得たparlêtreの定義と言えよう。

S.K. beau注1)、それは人間において存在l'êtreを糧に生きること(=存在を空にすることqu'il vide l'être)を条件づけるものである。この存在を人間はもっている限りそうなのであり、それは人間の身体注2)なのだ。人間が身体をもつのはこのことからしかありえない。ここからわたしの用いる表現parlêtreが説明できる。parlêtreはフロイトのl'ICS注3)(無意識と読める)を塗り替えることばとなる。だからわたしのために場所を空けてくれたまえ注4)。フロイトによる無意識が、かれが無意識を発見した(発見とは一瞥のもとになされる。たとえそれが発明であり注5)、それが特許目録に収載された後でなければ発見とはいえないものだとしてもそうなのである)と言えるのは、無意識がLOM注6)を構成するものとして語られる知である必要がある。パロールとはもちろん、存在が意味を持つこととなる唯一の場所であると定義される。存在の意味というものが、存在を所

有することを司っているとするのは、認識についての妄言による言い逃れにすぎない。

注 1) S.K.beauとは音からしてescabeau(踏み台)の意味を汲んだものである。(“L’S.K. beau”, Philippe Lacadée 【[https://www.lacan-universite.fr/wp-content/uploads/2015/02/Ironik5-Rubrique-Lacadée.LV\\_.pdf](https://www.lacan-universite.fr/wp-content/uploads/2015/02/Ironik5-Rubrique-Lacadée.LV_.pdf)】を参照いただきたい。このなかで、Castanet H., La sublimation. L’artiste et le psychanalyste, Anthropos, 2014. et Castanet H., S.K.beau, Éditions de la différence, Paris, 2011. への言及があるが筆者は未読である。いずれにしても、大文字S.K. についてはLacadéeは謎のままであると言っている。一般にラカンは意味を取捨して捉えなければならないものを大文字アルファベットで表すことが多い。セミナーR.S.I.からしてそうである。繰返し述べるが、現実界に「意味」はなく、ex-sistenceの結果意味は生じて来るのであるからである。芸術家においては「症状」は昇華sublimationにより作品として生まれ変わる。現実界へ向かうにあたっての最後の抵抗が「美」le beauであることはセミナーVII 巻で示されている。sublimationのラカンの定義は「ある対象をくものの高みへ引き上げる」*élever un objet à la dignité de la Chose* であった。escabeauは文字通り*élever* のためのものである。じじつラカンはここからさらに*hissécroibeau*, *hessecabeau*と表記をずらして行くのであるが、これにより説明は重層化される。*hisser*は『心理学草稿、第II部、A：ヒステリーの精神病理 [1] ヒステリー的強迫、pp.112,113(Érèsの独仏対訳版による。原文ではDer Soldat opfert sich für einen mehrfarbigen Fetzen auf einer Stangeとなっており、前綴りのaufがあることにより、「上」にあるものに身を捧げる＝自己犠牲を払う、といった語感を読み取ることができのではないだろうか。単に*opfern sich*あるいは*aufhinopfern sich*とは異なるはずである。因みに『フロイト著作集』7、『科学的心理学草稿』、小此木啓吾訳では「ある兵士が竿の先に付けられた、色とりどりのぼろ切れのために自分を犠牲にする … 」となっている)の件への連想が働いて、これがセミナーVII 巻の上述したsublimationのラカンの定義となっているものと看成せる。*croi*は*croître*, *croix*と関係があるのであるか。一方*hessecabeau*の方は、hをつけたのは何故なのか、単なる保続症的(しばしばラカンは「老化」を確信犯的に演じる)表れか、いずれにせよ*esse*はフランス語*être*の実詞化形であり、後期ラカンにおける*\_le corps*である。



注2) 身体le corpsは、クラシカルなラカンにおいてはbiologiqueなものとしてあまり重要視されていなかった。ジュイッサンスがラカンの中心概念となることによりle corpsはjouissance de l'êtreの場となり、言語はこの肉体に寄生するものであり、であるからジュイッサンスは当初はシニフィアン(特に象徴的な意味において)とは相容れないものと規定されていたのだが、後期ラカンではむしろジュイッサンスを引き起こすものがシニフィアンであるという図式が成り立つ。ここら辺の理解のためにはJacques-Alain Millerの論文Les six paradigmes de la jouissance

(<http://www.pipolnews.eu/wp-content/uploads/2015/01/Les-six-paradigmes-de-la-jouissance-RETR.pdf>) のParadigme 5 : La jouissance discursiveを一読することを奨める。性感帯と外傷とについては既に述べたが、言語の肉体への寄生という事実からlalangueということばが生まれのであるが、この点からも、ラカンはチョムスキーの後継者が提唱してきた普遍文法を提唱するミニマリス(上述したMilnerがいうminimalismeとの関係については後述する)とは与しない。であるからMilnerがL'œuvre claireにおいて引用したEncoreの件にl'individuということばが使われていたのである。Milnerはラカンが選ぶことばの背景をどれだけ意識できていたのであろうか。

注3)これもアルファベット大文字の組み合わせである。無意識そのものは現実界に属すからであろう。

注4) «La chose freudienne»における“Moi la vérité, je parle”(Les Écrits, p.408)をパロディー化して言っているように思える。ここでのわたしjeはparlêtre、toiはl'inconscientということになる。

注5) Les non-dupes errentでは無意識はフロイトの発見ではなく発明である、とある。

注6)これもまたアルファベット大文字三字であり、音からl'hommeと関係していることはわかる。LOMはこのJoyce le symptômeに繰り返し登場してくる語であり、この講演の主題といってもよい。たとえばLOM, LOM de base, LOM cahun corps et nan-na Kun. は音からL'homme, l'homme de base, l'homme

qu'a un corps et n'en a qu'un.と読める。

Sinthome、1975年12月9日のセミナーでラカンはChomsky批判を展開している。ラカン流に言えば、Chomskyにとっての言語は器官であり、この器官は当の言語を受け取るコンセントのような道具、言語を習得する道具、ということは器官が器官を、ないしは言語が言語を習得することとなり、これが遺伝子により(「正常な」という但し書きが必要となるが)人間には普遍的に備わるように謂うならば転写される、という意味のことをいっていることとなる。このような仮説は反証不能である。となればポッパー的にいえば、Chomskyの言っていることは科学的言説ではないことになる。科学の定義についての論争は措くとして、但し現在進行中のエピジェネティクス関連の研究は、一種のパラダイム・チェンジを用意している感がある。たとえばレット症候群注1)はいわば遺伝子宿命論の反証とまではなりうるものではないが、アンチ・テーゼとして示されるということではできよう。いわゆるクリティカル・ピリオド注2)についての研究は遺伝子の静態的捉え方ではアポリアに陥っている諸事実を解明する転機を与えてくれるかもしれないのである。ラカンの生物学分野についての知識は驚くべきものがある。もちろんエピジェネティクスについてまでかれは語ってはいない。ラカンの死は1981年であり、21世紀について論ずるラカニアンもぼつぼつと現れてきてはいるが、最新の生物学的分野における諸研究について、かれらは冷淡であるし、ミレールはシャンジューに対して喧嘩腰でさえある。由々しき問題といえよう。ChomskyについてのこのSinthomeの件についても本国フランスにおいてさえ等閑に付されたままにある注3)。こうした状況にあって、Milnerの問題提起、フランスのエピステモロジー対英語圏のエピステモロジーという図式は重要なのであるが、なにしろ論述が(確かに論述的に書かれているが)粗雑である。フランスで分析哲学についてかかれた書物はどれもこれも「教科書的」な紹介本であり、本家本物のエピステモロジーの系譜の影響を受けつつ批判的に分析哲学を論じているのは、この分析哲学の嚆矢であるフレーゲをそしてラッセルを批判的に論じているのがラカンその人だけなのである。

Sinthome の件に戻ろう。言語が言語という器官によって発生してくるとするならば、それではこの言語を言語に戻してみよう、とラカンは皮肉を言いながら、言語マイナス言語は「穴」になるであろうから、これは現実界において象徴界

は穴を穿つというラカンの定式に繋がり、ここから Joyce le symptôme II の「存在を空にする」こと、そして肉体はジュイッサンスの場所である。Éthique de la psychanalyse では「もの」la Chose は、最初の現実(と遭遇するとき)から du réel primordial … シニフィアンの禍を受ける、とあった。Jean-Marie Jadan et Marcel Riter による La jouissance au fil de l'enseignement de Lacan においては、Éthique de la psychanalyse 以前のラカンにもジュイッサンスという語は散見できるので、それらの記述もあるものの、ラカンの領野がジュイッサンスであり、フロイトの領野である欲望から離れて確立するのがこのセミナーだとして、ここでのジュイッサンスを「もの」のジュイッサンスと規定し(唯一ラカン自身が la jouissance de la Chose という語を用いているのは Identification のセミナーにおいてだけであるが)以後ジュイッサンス抜きにしてはラカンを語れなくなる。Théodora Pertessi の博士論文 Vers une clinique de la jouissance([http://1.static.e-corpus.org/download/notice\\_file/1707648/PERTESSI.pdf](http://1.static.e-corpus.org/download/notice_file/1707648/PERTESSI.pdf))はフロイトの Genuss についての記述も含め網羅的であるが、ジュイッサンス、ジュイールを含めたラカン自身の用語は実に 47 に及ぶとされる。

注1) <https://ja.wikipedia.org/wiki/レット症候群>、参照のこと

注2) cf. [https://en.wikipedia.org/wiki/Critical\\_period](https://en.wikipedia.org/wiki/Critical_period)

注 3) ポルトガル語でかかれた Ariana Lucero なる者の Joyce, o corpo e a sublimação na contemporaneidade なるタイトルの論文を読むことができる。cf. <http://pepsic.bvsalud.org/pdf/rel/v2n3/v2n3a10.pdf>(その後、Éric Laurent の«Lost in cognition»にラカン側からのチョムスキー批判に多くのページを割いているのを発見した。機会があればこの記述についても触れることにする。) … 本稿は書きかけである(2017年8月